

高温到来！適切な温度管理を！

気象庁の1か月予報では、東北地方の気温は平年より高くなる可能性が高いです。また、曇天時や外気温の低い日でも、一時的な晴れ間でハウス内はすぐに高温になります。

育苗期間中は必ず温度計を設置し、こまめに温度を確認しましょう。遮光資材（高温時）や保温資材（低温時）の活用、ハウスの開閉調節を行い、天候に合わせた管理を徹底してください。

1 適切な育苗管理

温度管理を徹底し、充実した丈夫な苗に仕上げましょう。

出芽期からマルチ除去まで

○ベタがけのマルチ資材は、出芽が揃ったら直ちに除去して、がっちりした苗にします。マルチ除去が遅れると軟弱徒長の原因となります。

マルチ除去の目安	苗丈 (cm)	葉齢 (葉)
ハウス育苗	2.5	0.8
トンネル育苗	3.0	1.0



育苗後半の温度管理

- 徒長苗は活着・分けつが遅れるため、苗を伸ばしすぎないように注意しましょう。
- 夜間は、極端な低温が予想されない限りはハウスを開放し、外気に慣らして管理しましょう。

【育苗ステージごとの適切な温度と注意点】

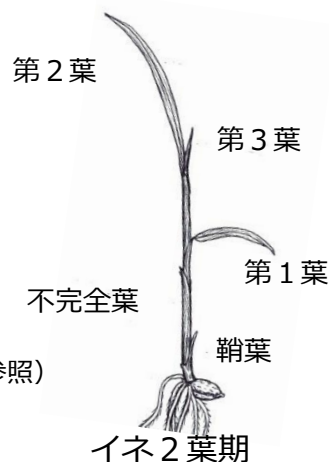
	昼間	夜間	注意点
出芽時	30~32℃		○無加温出芽は出芽を揃えることが重要。きめ細やかな管理を行う。
緑化期 (出芽後 2~3 日)	25℃	15℃	○外気温が 25℃以上の日は要注意。 午前中の早い段階にハウスを開ける。 ○低温時には保温に努める。 ○翌朝に霜が予想される場合は夕方の早い段階にハウスを閉める。
緑化期以降	20~ 25℃	8℃以上	

育苗期の水管理

- かん水は午前中に 1 回が基本です。**夕方のかん水は根張り不良となるため避けましょう。
- プール育苗では、1.5 葉期からハウスを開放し、入水します（上限は床土の高さまで）。2 葉期以降は、常時湛水とします（箱の上 1cm 程度の水深、最大でも草丈の半分以下）。苗が伸びやすくなるため、昼夜問わずハウスを解放します（降霜時除く）。

育苗期の追肥

- 適切に追肥を行い、葉色が濃い健苗の育成に努めましょう。（次ページ参照）
- 育苗培土に緩効性肥料（育苗一発肥料など）を使用した場合には、追肥は不要です。








【追肥の時期と追肥量の目安】

苗の種類	育苗期間	追肥時期	追肥量の目安
稚苗 (2.5 葉)	20～25 日	1.8 葉期	窒素成分が 10%の液肥の場合、現物 1 ㍓に水を加え 100 ㍓に希釈し（100 倍希釈）、1 箱当たり 500cc を散布。
中苗 (3.5 葉)	30～35 日	1 回目：2.0 葉期	
		2 回目：3.0 葉期	

育苗期間中の病害対策

○出芽を揃え、温度管理やかん水を適切に行い、病害を発生させない環境づくりが大切です。
カビの発生や、苗の生育異常がみられる場合には、早めにご相談ください。

【育苗期間中に発生する病害と対策】

病原菌	主な症状	発生条件	発生抑制のポイント
リゾプス	覆土を覆う白いカビ	 出芽時の 高温過湿	○33℃以上の高温、過 湿にしない
フザリウム	根のまわりに白色～ 淡紅色のカビ	 出芽～緑化期 の低温、 湿度の変動が 大きい	○低温を避け、適切な 温度を保つ ○過湿にしない
ピシウム	カビは見えない、ムレ苗 2 葉期頃に葉の萎凋症状	 出芽～緑化期 の低温、 湿度の変動が 大きい	○低温を避け、適切な 温度を保つ ○過湿にしない
トリコデルマ	床土や糞の修正に白色～ 青緑色のカビ	 水分不足、育苗 土の低 PH	○33℃以上の高温にし ない
苗立枯細菌病 もみ枯細菌病	第 2 葉葉身基部の黄白化、 枯死、坪枯れ	 高温過湿、育苗 土の高 pH	○高温過湿にしない ○発生した場合は苗を 速やかに処分

2 適期の田植えと初期の水管理

田植えの適期は 5 月 15 日～20 日頃です。【つや姫・雪若丸の田植えは 5 月 20 日まで】

田植え時の留意事項

- 田植えは、低温や強風の日を避け、**天候の良い日**を選んで行いましょう。
- 栽植密度は 70 株/坪、株当たり 4～5 本**を目安とします。
- 植付け深は 3cm 程度**に調整。深植えすると分けつの発生が抑制されてしまいます！
- 箱施用剤や除草剤は、ラベルを良く確認し、間違いのないように使用しましょう。

田植え後の水管理

- 田植え直後は、4～5 cm 程度の水深で活着を促進させます。活着後は、2～3 cm の浅水管理とし、日中止水・夜間かんがいで、分けつの発生を促進させます。

春季農作業事故防止啓発運動 展開中！ トラクターの事故に要注意！

- 春先はトラクター運転の感覚が取り戻せておらず、操作ミスが原因の事故が多くなる時期です。焦らず、気もまず、計画的に作業を行いましょう。
- 安全確認と予防対策（ブレーキ連結等）で公道でのトラクター事故を防ぎましょう。